

2) ハコベ＝ 繁縷／繁萇

ハコベはナデシコ科ハコベ属の総称で、一年草もしくは越年草、多年草で日本各地の路傍、休耕田、畑、畔などに生える雑草の一つである。茎の下部は地表を這うように広がり、株立ちまたは一本立ちした茎は、高さ10~30cmで、葉は扁平で対生する。花は茎頂や葉腋に**集散花序**となり、花径5mmほどで普通は白色の花で、稀に緑色のものや、花卉の退化したものなどがある。世界には120種が知られており、そのうち日本には18種が分布する。春の七草の一つとして昔から親しまれ、お彼岸の頃に花を開く。和名の由来はハコベラの略であり、中国では『繁縷』(ハンロウ)である。繁は茂るという意味で、その昔は髪飾りのことを意味していた。ところが次第に馬の鬣につける飾りを意味するようになり、『縷』という字が用いられた。このため下に糸が付けれられるのは誤用である。一方これに草冠を着けてヨモギ類を表すようになった。また縷(ル)は「ロウ」と読み、糸のように細いものを意味する。これが転じて細々としたものを言うようになったのである。以上のような文字面から推測すると、ハコベがよく分枝して繁茂する草であるために、ハンロウといったものと思われる。しかしこの繁縷はまた『繁萇』とも記し、中国では不思議なことにハコベではなくヨモギのことを意味しており、『繁』一字でもヨモギである。ヨモギの薬効は春の七草のどれよりも優れており、人々のヨモギに対する願望も、またヨモギに対する信頼感も極めて篤く、昔はハコベもヨモギも、みなヨモギと考えていたのだろう。因みにヨモギという文字は中国にはかなり多く蓬(杻)、艾(がイ)、葦(ハ)、蒿(コウ)、蕭(ショウ)、薛(セツ)、薦(セ)、蔚(ウ)、莪(ガ)、繁(ハン)など、それぞれヨモギの種類を表わしている。

さて話をもとに戻すとしよう。ハコベの別称としてはアサシラゲ、ヒヨコグサ、ハクベラ、スズメグサ、ヒンズリ、ホーベラなど極めて多い。アサシラゲは朝の光に当たって花がたくさん開くところから、朝開けといったものが訛ったものと言われている。ヒヨコグサやスズメグサはハコベが小鳥の餌とされていたからだろう。学名は『*Stellaria media*』で、属名は「星」を意味する『*stella*』で、種小辞は「中間の」という意味である。これはハコベの花の形を表現したものであろう。

ハコベは民間薬としては全草を催乳剤、虫垂炎、胃腸炎などに用いられてきた。また江戸時代にはハコベを炒って緑色の粉とし、これに塩を混ぜてハコベ塩と呼び、葉磨き粉に利用していた。歯槽膿漏や歯茎からの出血の予防薬になるという。またハコベの若葉は味噌汁の実や、お浸し、和え物などにして食べるほか、昔から春の七草として七草粥に炊き込んだ。秋の七草が比較的花の美しいものを挙げているのに対して、春の七草はどれも薬草になるもの、または食料になるものである。しかしそれにもかかわらず、このハコベは『万葉集』や平安時代の『勅撰和歌集』に現れないのは、むしろ不思議である。おそらく前述のホトケノザや、このハコベでもわかるように、時代により地方により、指すものや呼称が異なっていたのだろう。

ハコベは古典文学には登場しないものの、島崎藤村の詩の中で詠われている。

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子(ユウシ)悲しむ
緑なす繁縷は萌えず
若草も藉(シ)くによしなし
しろがねの衾の岡辺
日に溶けて淡雪流る

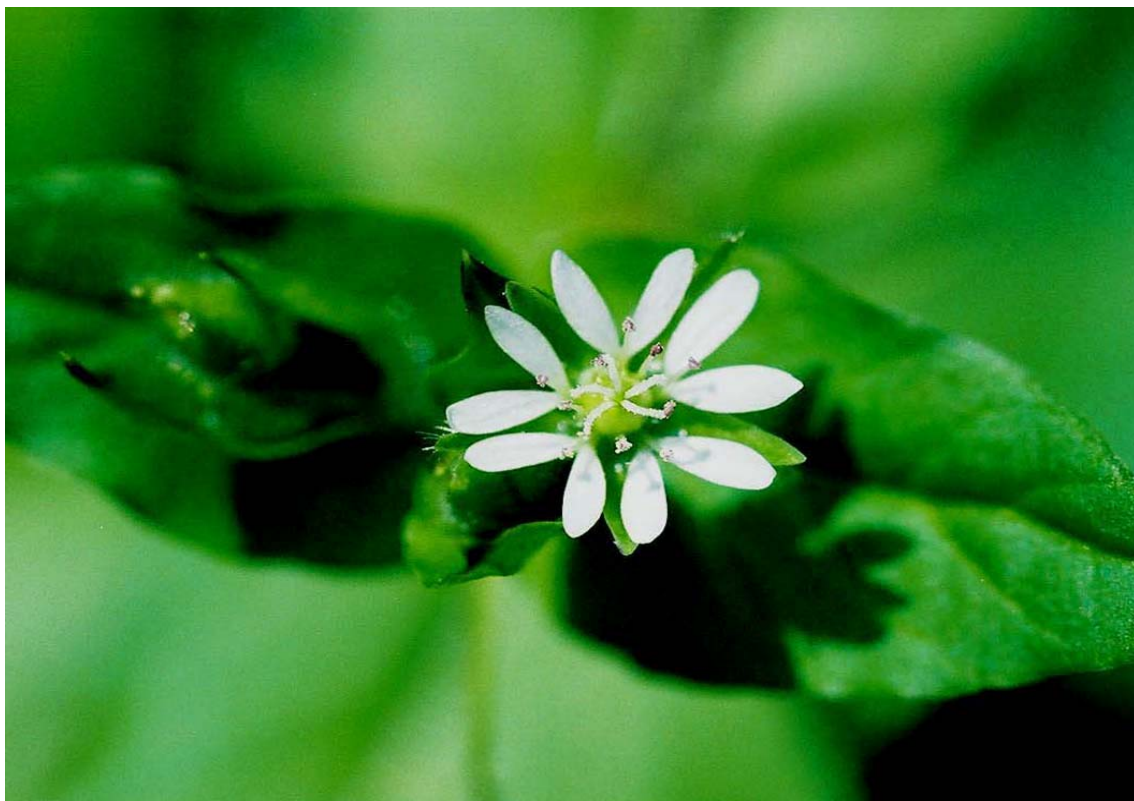
あたたかき光はあれど
野に満(ミツ)香りも知らず
浅くのみ春は霞みて
麦の色はずかに青し
旅人の群れはいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず
歌悲し佐久の草笛
千曲川いざよう波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

この詩は長野県小諸市にある『懐古園』の千曲川を見下ろす丘に石碑が立てられている。余りにも有名な詩であるが、明治 34 年に刊行された『落梅集』の巻頭を飾るものであった。この詩集の中には「千曲川旅情」の歌や、愛唱歌としても歌われた「椰子の実」などが収められ、まさに日本文学の夜明けを彩るものであった。藤村自身も『藤村詩集』の序文で「遂に新しき詩歌の時は来たりぬ。そは美しき曙のごとくありき…」と記している。しかし藤村自身が詩を捨てて、小説の世界へ入って行ったように、その未来は必ずしも明るいものではなかった。石川啄木や薄田泣菫がそうであったように、新聞社に勤めるかたわら詩を書いて、生計を立ててゆくような状態だった。いつの時代も文学で生活できるのは、ほんの一握りの人たちで、大半の文学を志した若者達は理想と現実との狭間で、いつか疲れはて消えていったのである。



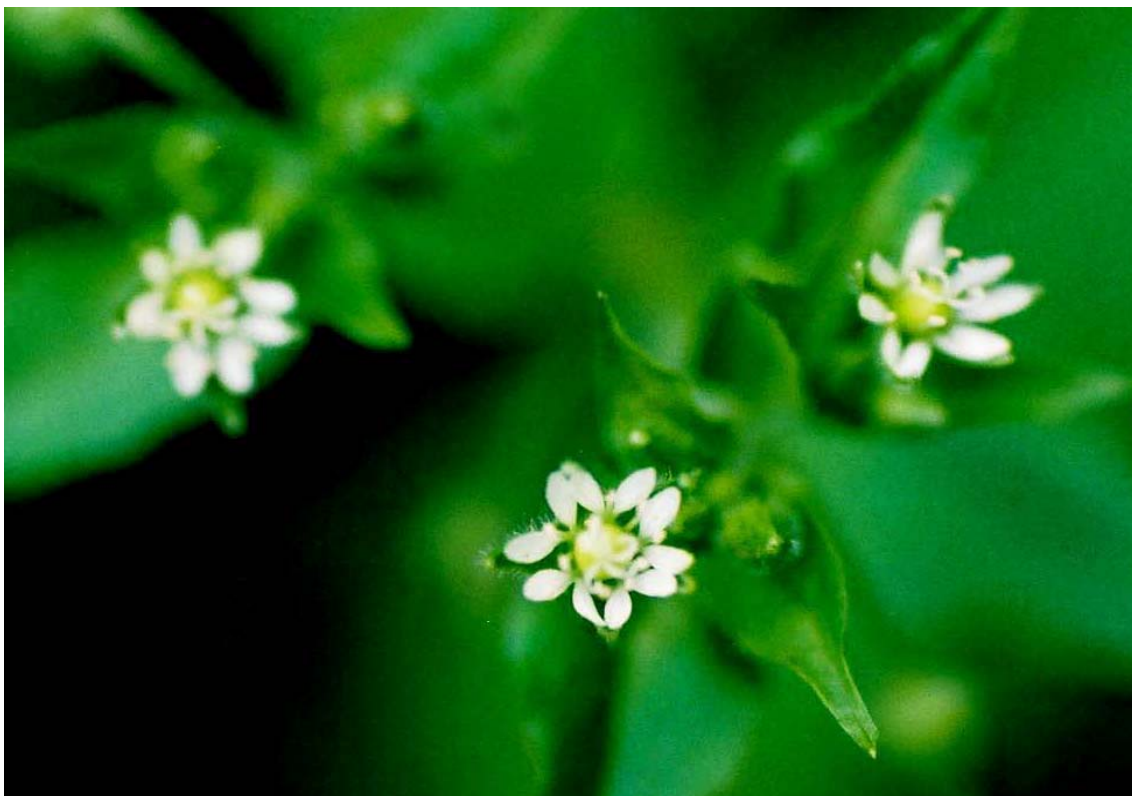
「緑なす繁縷(ハコベ)は萌えず若草も藉(シ)くによしなし」と藤村に詠われたハコベの花(埼玉市浦和区)。



ハコベの花、最近では外来植物が増えて、このハコベも安閑としてはいられないらしい。写真をよくよくみると花弁の幅が異なっており、それぞれ別種かもしれない(埼玉県寄居町)。



ハコベの若葉は食用になる。確かに柔らかそうな葉である(埼玉県寄居町)。



近縁種のウシハコベ。麦の伝来とともに帰化してきた『史前帰化植物』だという。学名は『*Myosoton aquaticum*』で、暖地ではほぼ一年中成育し、花を咲かせる(埼玉県小川町)。



懐古園にある『小諸なる古城のほとり』の詩碑(長野県小諸市)。

[目次に戻る](#)